2023/11/30

リトルハウス通信

先月、武蔵野大学社会福祉学科の２年生の皆様（8 名）が、担当の稗田先生引率の元、リトルハウスに施設見学の実習に来られました。

そこで今回のリトルハウス通信はその時の模様をお知らせしたいと思います。

当日、まずは 8 名の学生さまにリトルハウスで行われている作業を簡単にご紹介したのち、利用者数名の自己紹介から始まりました。リトルハウスのような就労系福祉サービスの事業所に見学に来たのは初めてだったようで、学生の皆さまもやや緊張した面持ちではありましたが、その後、リトルハウスの現サービス管理責任者で、リトルハウスの創設者でもある千田さんより、当事者家族としての心境とそれに伴うリトルハウス設立の経緯をお話させて頂いてから、グッと学生の皆さまの表情に真剣さを帯び、集中してメモを取りながら熱心に話を聞いて下さいました。

そしてその後行われた質疑応答の中で、非常に印象的だったやり取りがありました。それは学生のお一人が「障害をお持ちの方に対して、理解や共感をしていく為にはどんなことが必要ですか？」という趣旨の質問があったときです。私は自身の経験から「まずは当事者と触れ合って初めて理解や共感は生まれる」旨を当然のことのように説明したのですが、稗田先生はすぐさま「たとえ当事者と触れ合う環境がなかったとしても、今日のように当事者のご家族からお話を伺うことで、当事者に対しての理解や共感に近づくことができる」旨を仰られました。

私はその話を聞いて、ソーシャルワーカーが支援で働かせる「想像力」との関連性を感じました。それはクライエントの生活やニーズを理解していく為、まずソーシャルワーカーは「想像力」を働かせて、クライエントが感じている「生きづらさ」が生まれた背景を探り、そこから「決めつけ」ではない「理解と共感」に発展していくものと私は考えています。即ち「理解と共感」にたどり着くためには、支援者は「豊かに想像する」力を養っていく必要があると思います。そしてその「豊かな想像力」を駆使することができれば、当事者家族からの談話の中からも当事者の「理解と共感」に近づくことは可能なのだということを稗田先生は仰られたのではないでしょうか。

当事者家族の言葉の中には、人々の情感に訴えかけるものが常に内在していて、それはすぐに聞き手の想像力を刺激してくれるものです。

実際に千田さんの話を聞いていた学生さんたちは、千田さんの言葉のひとつひとつに真剣な面持ちで耳を傾けて下さったことがその証拠だと思いますし、それは即ち学生さんたちに「豊かな想像力」がしっかりと内在しているということなんだと改めて思いました。

（鈴木）